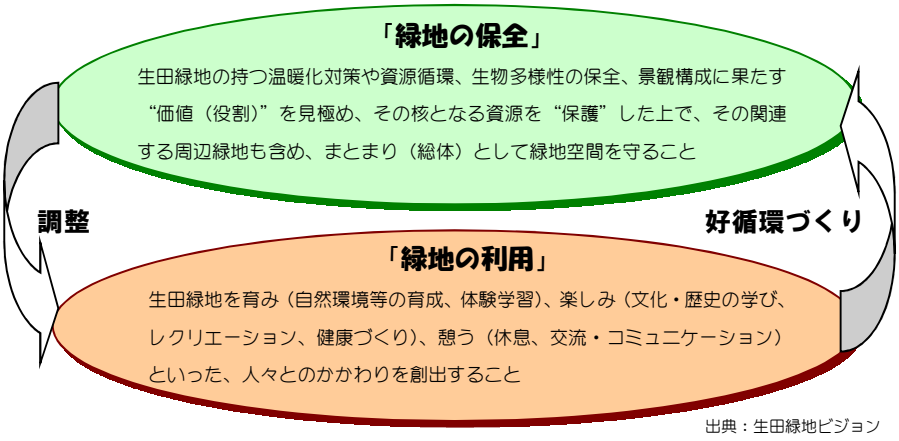
大規模緑地における自然観の異なる主体の協働のあり方

倉本　宣



出典：生田緑地ビジョン

カワラノギク調査中に怪我をしてしまい、立って話をすることができないので、座って話をさせていただきたい。生物多様性は生物だけのことではなくて、そこに関わっている人間のことが大事だと思っているので、表題について話す。

生田緑地では対立があるという話にしてはいけないと思い、大規模緑地とした。

自然観とは、ここでは物の見方という意味で使っている。

生田緑地では、元々、植生管理協議会と管理運営協議会があって、市も参加して協働で考えて実行してきたが、今年度からマネジメント会議ができて、そこに運営会議と自然会議が設けられ、私は自然会議を担当している。植生管理協議会にも関わった。

そこには異なる主体があり、行政と市民、市民の中にも幾つかの団体がある。生田緑地という一つの場所で、複数の主体が一緒に何かをやっていくためには解決して、できるようにならないといけないことが沢山あると思っているので、この話をする。

今日の話は決定版ではない。普段文句を言っていることをまとめたものである。機会があれば、自分の意見を表明したい。川崎では市民協働と言っているが、市民団体と行政が一緒に何かを行っている生田緑地では様々な価値観が交錯する。私は、様々な価値観の相互作用にこそ価値があり、相互作用によって将来の様々な課題を解決していけると思っている。しかし、現実には会議を何回も繰り返さないと意見をまとめることができなかったり、会議を行うことが負担になったりする。お互いに意見は持っていて、その意見を言うけれども、それだけでは相互作用は生まれない。そこで、どうすれば相互作用が生まれるのかを考えてみたい。

異なる価値観にはどのようなものがあるか。

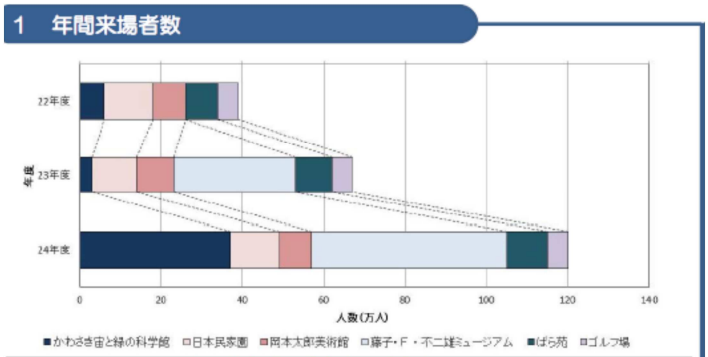
公園観

例えば、公園をめぐる評価には公園は良いもので、公園がある商店街は発展しているという考え方がある。このように公園を良いものとして評価しているのが「公園通り」で、渋谷公園通り、長居公園通り、駒沢公園などが例となる。一方、「公園の陳腐化」は 30 年ぐらい前に既に言われたことで、30 年前に既に陳腐なものになっていて「公園みたいになってしまった」と悪い意味で使われる。後者は、板橋区の赤塚公園というニリンソウが生育している公園でニリンソウを保全する活動をしている時に言われたことがある。公園をどう評価するか、公園をステータスの高いものだという評価とつまらないものだという評価がある。ただし、生田緑地の場合は、生田緑地をより良いものにしようということであって対立は無いかも知れない。

利用者数

利用の観点からも、満足度×利用者数が次の利用者数につながって重要である。利用制限によって資源を保護する必要があることもある。

（右は、生田緑地マネジメント会議の配布資料から）



	22年度（万人）	23年度（万人）	24年度（万人）	備考
かわさき宙と緑の科学館	6	3	37	H22年度は改築中、H23年度は9月まで
日本民家園	12	11	12	
岡本太郎美術館	8	9	8	
藤子・F・不二雄ミュージアム	–	30	48	H23年度は9月以降
ばら苑	8	9	10	
ゴルフ場	5	5	5	
合計	39	67	120	

工事観

近代的な工事こそ万能だという価値観と、近代的な工事には問題があって伝統的な工事を見直すべきとする価値観がある。植生管理協議会や自然会議においてしばしば対立する。

例えば、雨水をどうやって処理するかという時に、近代的工事観では、雨水はU字溝に集めて、場内から早く排出するのが良いということだが、伝統的工事観では雨水は集めないで、散らして、ゆっくり排出するのが良いということになる。

また、法面を保護する時にどうしたらいいのかという時にも、法面を固めて保護するというのが近代的な工事観であるが、植生によって保護するという考え方があり、それが伝統的な工事観だと思っている。

自分が生田緑地に関わるようになったのは 1996 年からで、植生管理協議会に関わるようになってからでも 8 年になるが、こうした対立があったにも関わらず、実際に工事後に、その結果を確かめてみるということができなかった。それは、そのような習慣が無かったからかも知れない。

自然科学者としては、何かをやったら、その結果がどうなっているかを調べて、次にどうするかを考える、先程の岸さんの話でいえば順応的管理ということだが、そういうことをするものだと思っていたが、なかなかできない。こういうことがどうなっているのかを、生田緑地の中で見ていきたい。

自然観

先程の岸さんの話にもあった。生田緑地の中でも、人工的な自然、二次的な自然、原生的な自然がある。

- 人工的自然　都市・公園　　人間の力が優占
- 二次的自然　里山・丘陵地公園・自然公園　　人間の力と自然の力のバランス
- 原生的自然　奥山・国立公園　　自然の力が優占

里山の目標像

②黒川農場の里山の部分の管理を担当している先生は伝統的管理をすれば昔ながらの生物が戻ってくると考えている。伝統的な管理というのは、機械を使って、お金をかけないで、短期間に、見かけ上は昔通りにするという伝統的管理であった。

③私の研究室の周りでは、現場をよく見ている人は、今いる生き物を見つけて、その生き物を大事にするという、先程の岸さんの話と近いが、そうしたいと考えている。

また、林学の人は、④利用されなくなったのであれば自然の遷移に任せればいいと言う。

①新しいレクリエーションの場というのは、造園の人たちがよく考えるやり方で、例えば、九州大学の重

松先生は林内の景観はどのようなものが快適かについて調べている。
⑤は、特定非営利活動法人よこはま里山研究所の人たちが考えているような立場で、新しい里山と関わる自分たちの暮らしをつくっていく。その暮らしの中に里山を位置付ける。
今は、どれがいいということは発言できない。
②の団体と③の団体の調整をどうするかはゾーニングによって区域を分けるしかないように思えるが、どちらも自分の場所を取られることになってしまう。

① 新しいレクリエーションの場
② 伝統的管理の継続の場
③ 今いる生きものの保全管理の場
④ 利用によって成り立っていた里山は利用されないのだから、いまは遷移に任せる
⑤ 新しい里山と関わる生活の中に位置づける

生物多様性観

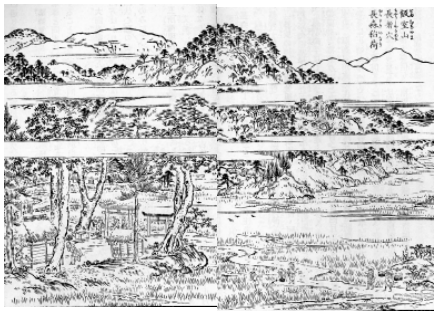
今、自分が話していることも生物多様性に関わることだと思っている。
生田緑地のような大きな公園は生物多様性の重要なコアで、エコロジカルネットワークの拠点である。でも、それだけではなくて、生田緑地には江戸時代からの歴史があるし、公園に関わる人々の暮らしがあったはずである。生物多様性については生き物の側のことを大事にするということも勿論必要で、加えてこれに関わる人間の側のことも押さえなければいけないと思っている。
一方、公園というのは生物多様性は関係ないと考えている立場の人たちもいる。こういう立場の人には生物多様性について説明させていただいたり、生物多様性というものはそんなに辛いものではないということを理解してもらう必要がある。

- 大規模公園は生物多様性の重要なコア
- エコロジカルネットワークの拠点
- 公園には歴史がある
- 公園には公園に係る人々の暮らしがある
- 公園では、一切、生物多様性は受け入れない立場もある

公園にかかる歴史観

公園には歴史があるということを意識したいと思っている。

- 公園には歴史がある
- 生田緑地防空緑地



（右写真の出典　江戸名所図絵）

公園に係る人生観

公園に係る人生がある。緑地管理学という授業で初めに学生に、公園の思い出タイムラインというのを書いてもらうと、主なものは生き物と遊びとスポーツと、少し勉強したことに係ることがある。大抵の人は公園についての思い出がある。公園は活動の場でもあるし、自然や周りのグループの人から必要とされる喜びを感じることができる場でもある。公園は人生にとって、とても面白い大事な場だと思う。

- 公園には思い出がある
- 思い出　生きもの、遊び、スポーツ、学び

- ボランティアなどの活動の場
- 自然から必要とされる喜び
- グループから必要とされる喜び

科学観（順応的管理）

都立桜ヶ丘公園で働いていて、ボランティアの人たちと関わっていた時には「やってみて、考える」という標語をつくった。彼らは初めて里山の管理をする。その時、少しやってみて、考えようといってやった。つまり、工事も作業も皆実験だと思う。目的を明確にして、方法を記録して、結果を皆で共有するということが必要である。

- やって、みて、考える
- 工事も作業も、大規模な実験である
- 目的を明らかにする
- 方法を記録する
- 結果を共有する
- 自由な立場から議論する

現場の共有から価値観の相互作用へ

生田緑地で活動している人たちと話してみるとどんなことがあるかということを検討した。
生田緑地で活動している人たちなので現場は共有している。
事例　里山倶楽部 B　2013/9/21
「外来樹種の大木とどうつきあうか」ということについて、私が話をして、岩田さんが皆の意見を聞いてくれた。

参考、キャンパスの自然憲章（明大専教連）

1. キャンパスには自然がある。
2. キャンパスの自然は地域の自然のネットワークを構成している。
3. 大学の構成員は，キャンパスと地域の自然の恩恵を受けている。
4. 私たち構成員は，生物多様性に配慮した行動をとろう。

一ツ橋大学でヒマラヤスギの伐採について反対して座り込みをした大学院生がいて、面白いと思って取り上げた。
一橋大学国立キャンパス
樹木の学習会

- 第二研究棟
- ヒマラヤスギ伐採
- 反対の座り込み
- 伐採取りやめ
- 樹木の学習会

ヒマラヤスギ

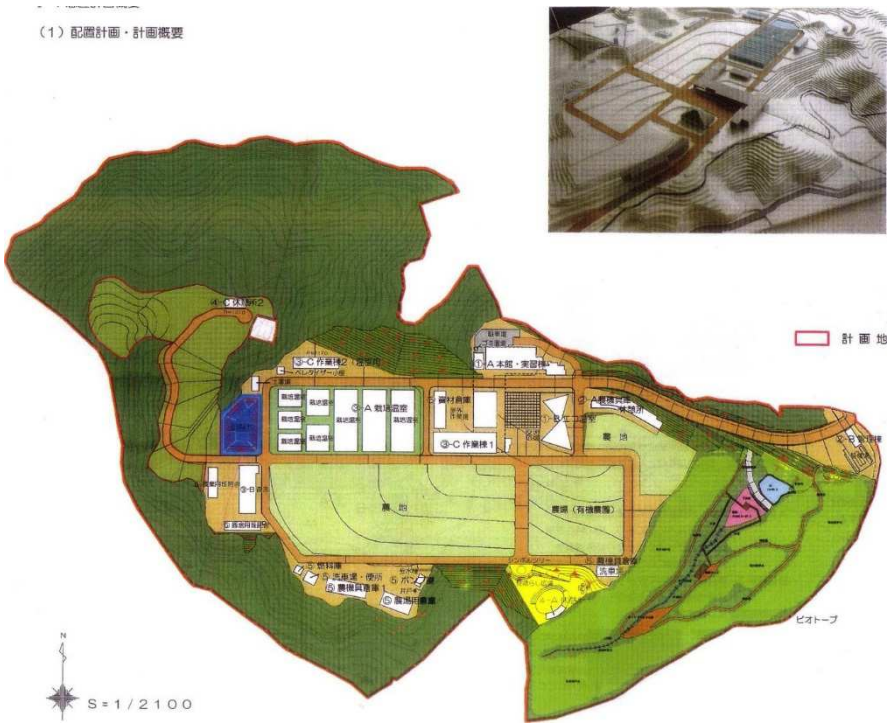
図書館や講義棟など、象徴的な建物にはヒマラヤスギの大径木がシンボリックに配置されている。
まずほかの植物を排除する化学物質（アレロパシー）を出していることだ。
根元にはほかの植物が生えにくい。これではキャンパスの植生の多様性を欠く。
さらに緑は火災に強く、防火の観点から植栽される樹木が多いが、ヒマラヤスギはなんと燃えやすいという。
早急に、ヒマラヤスギの生態を学び、ヒマラヤスギの本キャンパスにあるべき姿を論議したほうがいいのではと思ったのである。

明治大学生田キャンパス
登戸研究所以前からのヒマラヤスギ

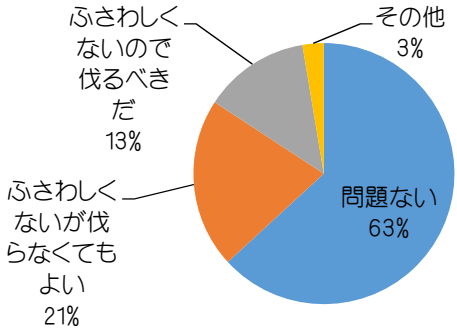
明治大学和泉キャンパス
予科の時代からのヒマラヤスギ

明治大学駿河台キャンパス
建物の建替えの際に教職員がお金を出し合ってイチョウを移植

黒川農場の法面緑化は自生の系統を用いた



黒川農場にもシンボルツリーとしてヒマラヤスギがある。そこで、専門家にどう思うかを尋ねた。



外来種のヒマラヤスギは黒川農場のシンボルツリーとして適当か
緑化工学会大会アンケート　n=38

生田緑地

- 科学館横のヒマラヤスギ　枝を切って残す
- 岡本前のメタセコイア　シンボルになっている
- 西口園路　スズカケノキの大木

巨樹巨木林調査（一部）
幹周 300cm 以上
ヒマラヤスギ 55 本（新宿御苑他）
メタセコイア　11 本
イチョウ　5248 本

外来樹種の大木を肯定する立場

- 長い時間、そこに生きてきた
- 同じ生きものとして尊敬の念
- なじみがある
- 長い間生きているが繁殖しているわけではない

公園の林

図1・2　緑の空間形式のイメージ

緑の空間形式のイメージ
高橋（大阪府立大学）

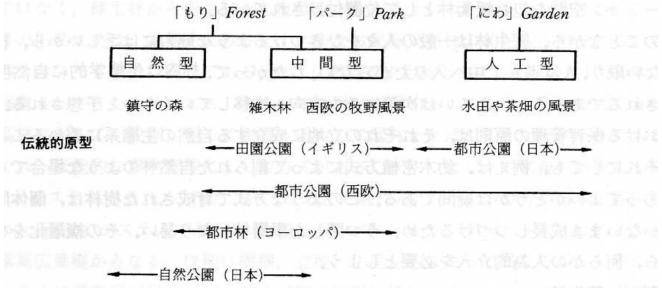


図1・3　緑の空間形式と公園緑地

緑の空間形式と公園緑地

生田緑地憲章

持ち込まない、持ち出さないはいつからか？

- 持ち込まない
- 持ち出さない
- 先見性
- 管理行為

生態工学

- 人と自然との関係学
- 生態系と人工系の調整技術を確立したい
- 公園についても科学が必要　　生田緑地学
- 考えていることや感じていることが違うのは当然である
- 違いを知った上で、一緒に活動する方法を考える、開発する
  いやなことを我慢して一緒に活動するのではなく、ポジティブに意味のあること、新しいパラダイムとして活動する
  一緒に活動する方法は、別の言い方をするなら、順応的管理になるが、
  科学を上手に使うことだと思っている。
  こういうことを、これから展開していきたいと思っている。

倉本　宣　講師の横顔

1955 年　東京都立川市生まれ　人生の大部分を多摩川流域で過ごす
1975 年　日本ナチュラリスト協会（子どものための自然観察会）
1980 年　都立赤塚公園におけるニリンソウの保全
1983 年　大島自然愛好会結成
1991 年　桜ヶ丘公園雑木林ボランティア創立
1995 年　「多摩川におけるカワラノギクの保全生物学的研究」（学位論文）
1996 年　明治大学、生田緑地へ
1997 年　生田緑地の植生管理計画策定活動
2002 年　多摩川カワラノギクプロジェクト結成
2007 年　黒川谷戸プロジェクト開始
現在、明治大学教授（応用植物生態学研究室）